

佳作

発達障害について

埼玉県立戸田翔陽高等学校 1年

高石 あかり

私は今まで、障害を持つ人と話したことがありませんでした。そのため、障害についての知識はテレビやインターネットで知ったものしかありませんでした。

小学生の頃、同じ学年に特別支援学級で過ごしている、発達障害を持つAくんがいました。ですが、どう話しかけたら良いか分からず、私は六年間で一度もAくんに話しかけることができませんでした。そして、Aくんは私たちと同じ中学校ではなく、特別支援学校に通うことになり会うことは無くなりました。私は、六年間あったにも関わらずAくんに話しかけることができなかったため、とても後悔しました。

ですが、今年の夏休みに発達障害を持つ子が通う放課後等デイサービスで、ボランティアとして一日障害を持つ人と初めて関わりました。そこで私は、テレビやインターネットだけでは絶対に学ぶことのできないことを学ぶことができました。

そこで私が驚いたことは、同じ発達障害を持っていても一人一人できることとできないことが大きく違うことです。発達障害とは身体や学習、言語、行動などなんらかにおいて不全の状態であり、こだわりが強い、他の子供に関心を示さないなど様々な症状があります。関わった子の中には、コミュニケーションをとることができ、外で運動をすることもできる子もいましたが、言語を発することができず、コミュニケーションをとることができない子もいました。中には、施設のスタッフの腕を掴み爪を立てたり、首を掴むなど危害を加えてしまう行動をする子もいました。

私は、施設の管理者の方に発達障害の特徴や接し方について話を聞きました。その話の中で特に驚いたことは、言葉を発することができても、その言葉の意味を分かっていない子もいるということです。私は、言葉を発せられる子は言葉の意味を理解していると思っていたため驚きました。それと同時に、自分には障害についての知識が無いことを改めて感じました。例えば「雨が降っている」という文は、管理者の方によると雨という言葉は理解できても、雨が降るということがどんな意味なのか理解することができないそうです。そのため、「今日は雨が降っているから外で遊べない」と伝えても、雨が降るって何？そもそも降っているって何？と理解することができないと話されていました。

そして、私は発達障害を持つ人との関わり方についても教えてもらいました。発達障害を持つ人には、今自分が何をしたいのか伝えることができない人もいます。ですが、最初のうちはその人のことを見ても何をしたいのか読み取ることができません。そのため、何ヶ月も関わってその人は何が好きなのか、よく何をするのかなどを理解することで初めて、今その人が何をしたいのか読み取ることができると話していました。

その方は、このデイサービスでの時間を通して運動をしたり、言葉を学ぶことでできないことを減らしてできることを増やしたいと話されていました。そのため、施設にはひらがなの一覧表やマラソンの記録表が壁に貼ってあったり、バランスボールが置いてありました。他にも、椅子の座り方を注意したり、靴を自分で履いたり脱いだりすることができるようサポートをしていました。

私は今回の経験を通して、障害についての知識のなさを痛感しました。今までは身体や言語などが不全の状態ということは知っていても、詳しい症状については知りませんでした。ですが、運動やコミュニケーションをとることができる人もいれば、言葉を発することや一人で動いたりすることが難しい人もいて、同じ症状を持つ人はいないと気付きました。そして、障害を持つ人も持たない人も、見た目や性格が誰かと同じ人はおらず、一人一人が大切な個人です。私は、個性を認め、誰にでも分け隔てなく接することのできる人になりたいです。そしてこれから先、障害を持つ人に出会ったら、Aくんの時のように話しかけないのではなく、自分から声をかけられる人になりたいです。